

多賀城の歴史探訪

多賀城はかつて東北地方の行政と文化の主要拠点でした。「城」と名前がついているものの、多賀城は実際には城ではなく、この地方の政務を行う中心的な役所でした。この地方の政権を担う場所であった多賀城は、重要な政治的・宗教的な行事や儀式の場でもありました。

多賀城の最初の建物は奈良時代（710-794）の 724 年に建てられました。この城は周辺地域を見渡せる高さ 30m の丘の上に築かれました。城の建物は、各辺が約 900m の敷地内に建てられ、周囲を高さ 4.5m の土壁で守られていました。城は長年の間に 3 回再建・拡張されました。

300 年間にわたって、法律や政策は多賀城で決定されていました。しかし、11 世紀以後、多賀城は政権の交代によって廃城となり、土地の大部分は農業に転用されましたが、地元の農民は多賀城の石の土台に触れないように気をつけていました。江戸時代（1603-1867）になってから多賀城跡はようやく再発見され、この地域を治めていた伊達氏の支援のもと、仙台藩の学者たちによって、数多くの硯などの史料が世に知られるようになりました。

丘のふもとでは、2024 年に城門の復元工事の完了が予定されています。近くには小さな木の小屋に守られた「多賀城碑」があります。この高さ 1.96m の大きな石碑は、762 年に行われた多賀城の修繕工事を記念して建てられました。この碑は文学の世界では「壺の碑」とも呼ばれており、俳人・松尾芭蕉（1644-1694）は、変化し続ける世界に対してこの碑が保っている永続性に深く感銘を受け、有名な「奥の細道」という作品中でこの石碑について述べています。多賀城碑は重要文化財に指定されています。

多賀城跡から 1km ほど南西には、寺の遺構（多賀城廃寺跡）があります。一説には「観音寺」と呼ばれていたというこの寺は、多賀城と同時期に建てられたと考えられています。寺の境内跡地は現在気持ちの良い公園になっており、ここでは寺のお堂とその側に建っていた大塔の基壇を見ることができます。多賀城廃寺跡は 1966 年に特別史跡に指定されました。